
役者がためにオレは死ぬ。

にた

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

役者がためにオレは死ぬ。

【Zコード】

Z2925F

【作者名】

にた

【あらすじ】

新人役者の神谷剛が、初の映画主演の話を受ける。その映画を撮るためにあたつてオーディションがあるという。そのオーディションの内容とは…。

シーハー（龍書モ）

感想、訂正などありましたら教えて下さい。
がんばります。

シーン1

「おはようございます。」

おれは、最近この芸能事務所に入った新人役者だ。
名前は神谷剛かみやつよし。

高校時代は何かと悪いことばかりをし、みんなと見たシネマに憧れて高校卒業後いくつか履歴書を送り、今の事務所に見事合格したのだ。

「おう、神谷！社長が呼んでたぞー。」

事務員の前山さんだ。

前山さんはよく「飯に連れていくれたりする面倒見の良い中年男性（41）だ。

ただ単に、独身で寂しいだけっていう噂もあるけど、実際この人に助けてもらっている人は多い。

「わかりました、すぐに行つきます！」

おれは社長室に向かいノックをした。

コンコン

「神谷でーす。」

『おう、入れー。』

ガチャ。

ドアを開けると事務所の社長がイスにもたれて、どっしり構えていた。

「神谷、突然だけお前に映画主演の話がきてるんだが。」

「まじっすか！？やります、やりまーす。」

おれは、チャンスとばかりに食いついた。

事務所に入つてエキストラやチョイ役なんかやつてきたがやつとま

ともな仕事が映画主演なんて、やっぱ見る奴が見るとわかるんだなー。

「それで、映画を撮るにあたってオーディションがあるらしいんだが…大丈夫か？」

「なーに言つてんすか、たとえ根性焼き100束されたとしたつて耐えてみせますよ！」

「…よし、じゃあ明日の朝9時に向ひつの映画会社に面接行つてくれ。」

「わつかりました！はりきつて行つてきます…じゃ、失礼します！」

ガチャ。

おれはハイテンションで社長屋を出た。

(くうー、映画主演なんて最高じやねーか！どんな映画なんだろー。ここでヒットしたらオレも名優の仲間入りだな。くくくっ…)

社長屋の前でたまらずガツッポーズをした。

すると前川さんが前から歩いてきた。

「何だ神谷、うれしそうだな！良い知らせだったのか？」

「前川さん、おれ映画主演決まるかもしれません！くくくっ。」

「何！？お前それ…ヒットしたら飯連れてけよ！…絶対だぞ！！！」

「何でも食わしてあげますよ…ふふふふふつ。」

それからしばらく舞い上がつて話し続け、明日のために早めに寝た。

そして、次の日の朝おれはその映画会社に向かつた。

「東勝プロダクション…ここか。案外小さい会社だな…。」

入り口付近には警備員らしき人がいた。

「あの、映画の依頼で来たんですけど…。」

おれはその人に通行書を見せた。

「確認しました。どうぞ。」

当たり前だが、すんなり中に入れてもらった。

ここからが正念場だ、オーディションとやらで監督に気に入られて映画主演をゲットするぜー

「えーっと…2階の応接室の…おつ、あつたあつた。」「ドキドキ。

「ンンンン。

「す、すいませーん。今田オーディション受けで、させてもらいます神谷剛です。」

「…………おひ、入れやー。」「は、はー。」「は、はー。」

ぶつきりぽつね返答に戸惑いつつドアを開けた。

そこには30代半ばの男がいた。

見た目はまあ…やんちゃ好きそつな強面の…まあ、ぶつかっけヤーさんみみたいな人だった。

おれは、映画主演とかそんな事は吹っ飛び、一気に帰りたくなった

…。

「おー神谷くーん、来てくれてありがとうねー、いやいや履歴書見て気に入っちゃったよー。高校時代とかやんちゃだったらしいねーペラペラ…」

いきなりその人のマシンガントークが始まった。

「はあ…ええ…そうですね…。」「（なんだよコイツ、早く監督をだせ……いや、もしかしてコイツ

が）」「ペラペラあつ、遅れてごめん僕が監督の平塚力でーす。」「（やつぱりかーーーいーーー）」「で、あのオーディションは…。」

「おう、そうだったそうだった。今回僕さあ、任侠もの撮りたくてさあ…若くして組をまとめる主役の人があるからだよー。んで、売り込みに来てもらつたときにキミの履歴書とかいろいろ気に入つ

ちゃつてね。キミならリアルな映画撮れると思つてオファーしたんだよー。

で、オーディション内容なんだかど、この町を統一して欲しいんだ
わ。

一
あ
は
い
?

「おはよう」から始めて「おはよう」から

そういうと、平塚監督は紙袋を渡してきた。中を見ると高校？の制服が入っていた。

ああ、あれは？」

「高校の制服だよ。すぐそこの青空高校の。まずは高校制覇してからハグの方がやりやすいかなと思つてな！」

?) .

おのせはこの語はさへ

てんだ
！
！

(「この人世上には本物だ!!!! あのハガ社長!!!!!!)

されば半べっく状態で返事をした。

断ればこの場で殺されそうな気がした。

しゃ
本氣で：

そして、おれは高校生に戻ることになった。

シーン2

青空高校。

おれは地元から上京してきたため、何の縁もないこの町でのからのスタート。

つまり大暴れしきつてことだな。

へつ、やるからには死ぬつもりで行くぜ！

「えーっと、学生証には3 Aつて書いてあるな…。あ、なあ3

Aつてドコ?」

「あー、3 Aなら4階の東館つすよー。」

「サンキュー！…あー…東館わかんねーから連れて行つてくんねえ
？」

「ま、まじっすか！…じ、じゃあ下までなら…。」

「?」（なんだコイツ、何でびびつてんの?）

それで、おれはこの青高の生徒Aに連れていつてもらひつ事にした。

「あ、あれが東館つす。」

「ん？ 窓ガラスほぼ割れでんじやん。」

「東館は、檻みたいなもんで、凶暴なヤツや狂つたヤンキーたちが
まとめられたクラスばっかりで、ケンカは日常茶飯事、たまに救急
車もくるくらい荒れてるんす。」

（おいおい、初っ端ハードル高くないか…。）

「じゃ、授業始まっちゃうんでおれはこれで失礼します。」

「お、おう、案内ありがとな。」

そつこいつと青高生徒Aは走つて行つてしまつた。

おれは覚悟を決め、東館に入った。

中は落書きどドミだらけだ。

階段を上り、4階についた。

3 A。

教室の前に立つとやけにシーンとしている。

ガラ。

ドアを開けると、無造作に並べられた机があり、誰もいなかつた。
(何だよ、まだ誰も来てねーじゃねーか。)

適当に窓際の一番後ろの席に座る。

(先生すら来ねーし、…暇だな。)

「くあーあ。」

思わずあぐびが出た。

ガラ。

すると突然、誰かが入ってきた。

「…誰だ、お前？」

見るからにヤンキーなリーゼント野郎だ。

「今日から転校してきた神谷だ。よろしく。」

すると、リーゼント野郎は近づいて来た。

「おう、おれ桑田よろし、く！」バコッ！

リーゼント野郎は、いきなり殴りかかってきた。

「ぐあっ、…テメー。」

「そこおれの席なんだよ！」ビュン！

そいつの右フックがまたおれに田掛ってきた。

「おい、あそこ誰か倒れてんぞ。」「
まじだ、朝っぱらからよくやるなー！」「
つて、おい！あれ桑田じやねえか！？」「
おい、桑田ーどうした！？大丈夫か！？」「
…転校生だ。…すげえ…強え…。」

「あん？高校生？？」

ガラツ

ドアを開けると、そこには平然として座っている神谷がいた。

「おじテメー、転校初日からいじ度胸じやねーか！……」

「やめとけ、桑田だつてそんなにケンカ弱えほりじやねえだろ。おれたちじやじうにもなんねえよ。」

「…今日から青校に入った神谷だ。お前ら、おれの下につくくんねーか？」

「なんだとテメー！」

「桑田つてやつはおれの下につくって言つたぜ。」

「！…！？」

「じゃあ、一人ずつタイマンはつて、負けた方が下につくってのはどうだ？」

「…じ、上等じやねーか！やつてやるよーー。」

「フン、…じゃあ、行くぜーーーーー。」

「ドスツ！！」

「ぐあつ…はあはあ。まだ…負け…。」 ドサツ。

「もう一人のやつ、かかつてこー。」

「いや、おれは止めとく。」

「賢いやつだな。おい、ロイシの名前は？」

「白田。」

「…お前は？」

「屋代だ。」

「…へ、よろしく。」

それから神谷は、次々と現れる3
総勢22名、内リタイア1名
その日、3 Aは全滅した。
Aの生徒を撃退していく。

ガラス。

『おはようござりますーー。』

朝っぱらから男共のムサシ声が響く。

「うわ！なんだ、お前ら墨苦しにな！」

「自分ら、神谷さんの強さに惚れましたーこれから3 Aをよろしくお願ひしますーー。」

(まさか初日からこんなにつまらへーとはな...)

「おー、とりあえず堅苦しいのはやめにしておき。で、おれは3 Aのトップじゃねえ。青校のトップだ。んで、いすれはこの町のトップに立つーー。」「...神谷さん、それはいらっしゃなんでも...。」

「え？何で？？」

「おれが説明するよ。」

「おー、お前は...屋代だっけ？」

「ああ。まず、この学校のトップは3 Bの熊上だ。そいつを倒さね一限り青校のトップは無理だな。そして、この町には敵対する高校が2つ黄山高校と赤木学園。この3つの高校をまとめたやつなんて聞いたことがねえ。つまり、勢力はみんな互角なんだ。」「ふーん。じゃどうあえず3 Bの熊上につーやつをぶつ飛ばしゃいいんだな？」

「それができればな...。」

「...なんでできねえんだよ？」

「熊上は今、暴力事件で鑑別所入ってんだ。東館のガラスだけ妙に割れてるだろ？？熊上がいなくなつてまとまりずに暴れまくつてんだよ。」

「でも何でうちのクラスはガラスとかきれいなんだ？」

「A組とB組は派閥違いなんだよ。A組はB組に関わりつけはしね

えし、B組のやつもバカじやねえ。トップがいなくなつた今、A組に攻め込んで来るやつはいねえんだよ。」

「ふーん、じゃおれが昨日みたいに一人一人ボコボコに倒しゃいい

…。」

「アホ！それじゃお前の体が持たねー。今日だつて拳握るのも辛いはずだ。」

「…む、むう。」

「とりあえず今は熊上が帰つてくるのを待つーお前の拳も休めとけ。」

「屋代…お前、案外いろいろ考えてんだな。」

「…おれだつてお前の強さには惚れてんだ。トップになるんだつたら協力くらいさせる…。」

「ああ、頼んだ！」

神谷は満面の笑みで返した。

すると屋代を含め、クラス全員が笑みを浮かべた。
神谷は、その瞬間3 Bの仲間に惚れた。

数日後。「大変だ！」

A組の一人が教室に飛んで入ってきた。

「どうした？そんなに慌てて。」

「赤木学園の奴らが攻めてきた！…！」

「はあ！？どういうことだ！…？」

「何か昨日、B組のやつらが町で赤学のやつらをボコボコにしたらしくて。『熊上か屋代連れてこい』って叫んでるんだよ！…！」

「どーする屋代！？」

「くそつ、熊上がいねーからつてむやみに暴れやがつて…。おれ一人で行く。神谷達は来なくていい。」

「でも…おれたちも行くよな！？神谷！？」

「…屋代。」

「…大丈夫だ。」

「…わかった。待ってるよ。」

ガラツ

そういうと屋代は教室を出て行つた。

教室にはしばらく沈黙が流れた。

シーン4

「……神谷さん、何で一緒に行かなかつたんすか？おれら……仲間じゃないんすか！？」

「……仲間だから信じて待つんじゃねーか。あいつが大丈夫って言つたり、おれたちは信じてまたなきやいけねー。」

「……神谷さん。……わかりました。おれたちも信じます！」

それから1時間後。

ガラツ。

「ん？屋代！大丈夫か！？」

「……ああ、何とか話し合いで決着つけた。」

「あいつら何て！？」

「昨日ケンカしたのがB組の新井らしいんだ。だから、今日の6時に廃工場の駐車場で新井と赤学の城崎がタイマン張ることが決まった。」

「……」

「……？」

「……城崎って誰だ？？」

「……そうか、神谷さんは転校して來たばっかで城崎のこと知らないんですね。城崎つてのは赤学のトップはつてるやつです。武闘派で赤学至上最強の男つて噂ですよ。」

「ふーん。で、屋代、その新井つてやつは大丈夫なのか？」

「ああ、今いきさつを伝えてあいつも了承したよ。」

「そうか。新井には氣の毒だが、それで済んで良かつたな！」

「まあ、下手したら学校同士の戦争になりかねねえからな。」

「……やっぱ、屋代はすげーよ。おれだつたら落ち着いて話し合いかなん何かできねー。」

「ははは。だるつなー。」

次の日。

「くそー。やられたー。」

「ふあー。あ。どうした屋代、朝っぱらから。」

「新井がやられた！」

「ん~くあつ。それは昨日からわかりきつてたことだろ?。」

「…バカ!赤学のヤツらに騙されたんだよー。新井のヤツ集団でボ

「られて、今入院してるらしきー。」

「あー!…どういうことだ!…赤学のトップってのはそんな卑怯なことすんのか!ー!ー?」

「おれだつてわかんねーよー!…城崎がそんなヤツだなんて知らねーしよー!」

「…おれが赤学行つてくるー。」

「神谷ーお前が行つても城崎が出てくるとは思えねー。」

「じゃあどうすんだよー!ー!ー!」

「…おれも行へー。」

「…案内よひじへー。」

「…場所わからんねーんじゃねーか。」

そして、たつた2人の青色が赤い集団の巣に飛び込んでいった。

「叫ぶぞ屋代。」

「…ああ。」

『おひあああ、城崎いにい……出で』

その声に反応して、赤い集団が50人近く集まってきた。

「何だてめえらー！青校が何の用だ！？」

「わざわざ学校に乗り込んでくるとは、い度胸じゃねえか！…
殺すぞ！…」

「うるせー、トマト集團。…おー、城崎だせやー。」

すると、集団の奥から男が出てきた。

「おー、おれが城崎だ。」

神谷はずかずかとその男に近づいていった。

「てめー、卑怯なマネしやがつて…。」

「あんー？』

「タイマン張れやー。」

「何だお前ー？」の事、熊上はじつちやつてんのか？』

「…知らぬーよ。」バキッ！…

神谷の右フックと共にケンカのゴングがなった。

シーン5

ドスツ！！

バキッ！

ゴツー！！

ガンッ！！！

2人の激しい殴り合いに、周りの赤学の生徒達は圧倒されて声を上げることもままならなかつた。

「城崎いい！てめーは絶対許さねーーー！」

「上等だーーぶつ殺しやるよザコがーーー！」

バキイッ！！

凄まじい音が響いた。

同時に2人の動きが止まつた。

ドサッ。

倒れたのは、神谷の方だつた。

「はあはあ、なあ城崎。…そんなに強えんだつたら集団リンチなんかしなくても、うちのやつ一人くらい余裕で倒せたたろーが！！！
はあはあ。…おれは、そんな卑怯なやつに負けた自分が、情けねえ。

「

ドサツ。

次は城崎が倒れた。

すると、屋代が神谷に近づいてきた。

「神谷…お前の勝ちだ。」

「あつ！？何言つて…。」

「城崎のヤツ気失つてるよ。」

「へつ、すつきりしねえな。ちくしょー。」

「その割に笑つてんじやねーか。ははっ。」

すると、赤学の集団の中からまた一人、男がでてきた。

「おい、青校。お前確か集団リンチつってたな。」

「ちつ、なんだコラ！この城崎が昨日、ウチの新井をタイムマンはるつて呼び出して集団リンチしたから、こいつやっておとしまえつけに来てんだろうか。」

「けが人はだまつてゐ。おれは青校の屋代だお前は？」

「赤学の2番目、真下だ。そいつの言つてる事が正しごつてんなら、

城崎は関係ないぞ。」

「！？」

「昨日、城崎は隣県に行つて帰つてきてなかつたからな。」

「じゃあ、誰が！？」

「たぶん、うち（赤学）のやつには間違いないだろ？。こいつで調べとく。」

「…じゃあ、おれら悪い事したな。」

「いや、城崎もここ最近退屈だつていつてたし。ちゅうど良かつた

んじやねえかな。おれらにとっちゃん良いもん見れたし。」「

「…バー力、おれたちはハブ／＼マングースかってんだ。」

「とりあえず今日は帰れよ。今度はおれたちが青学にお邪魔する。」「

「わかった。すまなかつたな、真下。…ホレ帰るぞ、神谷。」「

「いててて…。」

たつた2人の青高の赤学襲撃はその日のウチに町に伝わった。

神谷達はその後、新井を見舞うために病院に行つた。

そこで、城崎はその場にはいなかつたことを知らされる。

そして、新井に

「神谷の方が入院した方がいいんじやねーか?」といじられた。

その時、新井は自分がしたことを謝り、

「ありがとう」と告げた。

次の日、数人を除いたB組が神谷の下についた。

そして、城崎と真下が青校に訪問し、新井の件は、赤学の2年がやつたことを報告。

その2年には新井に謝罪させた。

後、赤学は青校の傘下に入る事を告げた。

神谷の高校制覇が大きく近づき、町を絞めるという目標に1歩踏み出した形となつた。

シーン6

赤学を傘下に加えた神谷だが、まだ自分の学校を支配できずについた。

神谷の下につくものは多いものの、まだ熊上の下を離れず神谷派に反発している熊上派がその牙城を崩さずにいた。

(早くしねーと映画主演の話が無くなつてしまつかも…。)

「神谷。やつぱり青校の上を狙つならもう熊上自体をやる他にないぞ。」

「うへん。つつてもその熊上がいないんじゃな～…。」

「よお、神谷に屋代。朝つぱらから何の話してんだよ?」

「おー新井。もうケガ大丈夫なんか?」「まだ、ズキズキすっけど医者が今日から学校行つてもいいってよ!で、何の話だよ?」

「いや、熊上がいねーと青高のトップは無理だつて話してたんだよ。」

「おー、熊上ね!昨日病院の近くでみかけたぞ!…」

「はあ!…?マジか!?!?」

「おう、もうあいつ釈放されたらしいぜ!」

「し、釈放つて…。あいつ、ここいら辺に住んでんの?」

「何なら連れてつてやろうか?」

「…家まで、知つてんのかよ。」

(何て便利な奴なんだ。)

そして放課後、神谷と屋代は新井の案内のもと、熊上の自宅に向かつた。

「着いた着いた。この家だよ。」

そこにはボロいアパートが並んでいた。

「こんなとこに住んでんのか。」

「おい、神谷！屋代！こっちだこっち。」

コンコン。

「おーい、熊上ーー新井だ新井ーーいるかーー？」「バカ新井いきなり呼ぶんじゃねー！！」ボカツ！
「いてつ。なんでだよ、いいじゃねーか別に。」

「…。」

「…。」

「…。」

シーン。

「…なんだ。いねーみてーだな。」

「…帰るか。」

ガチャヤ。

(…………いた。)

「ん？何だ。新井じゃねーか。」「ひっさしふりだな熊上！」

「で、何で屋代と一緒になんだ？それに横のお前は顔すら知らん。」

「とりあえずここで話すのも何だし、公園でもいくか！」

「ん、ああ…ちょっと待つてろ。」

神谷達は改めて公園で話す事にした。

新井は今までの経緯を熊上に話した。

「で、お前はおれを倒しに来たって言つのか？…へつ、バカバカしいぜ。」

「何だとコララ！！！」

「神谷つづったか。いいか、おれはもう青校には行かねー。青校支

配したいなら勝手にしろ！！！」

「…はあ！？」

「わかつただろ！もう帰るからな。」

「おい、熊上！！！」

熊上はこつちを振り向く素振りも見せずにそそくさと帰つていった。

神谷達はあっけにとられ、ただ呆然と公園に佇んでいた。

シーン7

次の日、やつぱり熊上は学校に姿を現さなかつた。

「つたぐ、何なんだよあの熊上つてやつ！…拍子抜けもいいところだ
！！！」

「まあまあ、これで青校のトップはお前つてわけだ。喜んでいいん
じゃねえか？」

「納得いくわけねーだろ！…まだあいつの下についてるやつだつてい
るんだぞ！それを熊上は学校辞めるからあれの下につけて言って
聞くようなヤツらか！？」

「…だな、あいつらも一応熊上信じて待つてたんだよな。あいつら
だけでも最後まで神谷の下にはつかねーかもな…。」

「だから熊上倒して一気に ore の下につけねーと青校はまともんね
ーんだよー。」

「…どうせこちにしろ、一筋縄じゃ行かねーな。」

ガラツ！

「大変だ！！A組のやつらが熊上の事知つてぶつ殺すつって出て
行つちまいやがつた！…」

「屋代！！！」

「まあ、じうなるだるうなとは思つたけど展開が早すぎだぜ！…熊上
んとこ行くぞ神谷！…！」

ガラツ。

「わりい神谷、つい口が滑つちまつた。」

「新井！おまえかアホウ！…お前も来い！…！」

そうして神谷達は、熊上の家に向かつた。

「よー、熊上！－青校やめるんだってな－！」

「……？」ま、松井。植木、白金、山城！」

「なあ、熊上。おれらで青校支配するんじやなかつたんか？ああ！」

三

「……悪い、忘れてくれ。」

九
チ
ン

ピンポン。

「太陽の隕石」

「どうする、屋代！？」

「どうする」で、探すしかね——だろ！——

「あくま」

「おああ、うれしい。」
—

「……じゃあぶつ殺してやるよ。」

ラシック

卷之三

「……お前、昨日の……！」

「どうせ、おまえらには関係ねえだろ？」「…………」

「うるせえ……向にも知らねー奴が出てくんない……！」

「だつたらお前らは熊上の何を知つてんだ……？？？とこいつと居たんなら、何で学校辞めんのかとか考えてやれんだろう…………？？？それができねーお前らは、ただのガキだ！！！」

「それに熊上……逃げてるお前もだ！！お前がひやんと向き合わねーと問題なんて増えてく一方なんだぞ…………」こいつらの納得の行くけじめをつけろ！！！じゃねーと、お前は一生前に進めねー！！！」

「！」

「…………！」

「うるせえつづつてんだろ！！！てめえらからぶつ殺す……？？？せ青校のトップになるならお前も屋代も潰さねーといけねーんだ！！！」

「行くぞ、お前ら…………！」

「雑魚に用はねーんだけどな。まあ、やるか屋代？」

「まあ、しようがねーな。」

シーン8

「バキイ！
ドカツ、ドスツ！！

「ぐああー！」

「なんだ、結構強いじゃねーか屋代。」

「ふうー。まあ、雑魚だからな。」

「お前ら、すまなかつたな…。」

「…なあ熊上。何で学校辞めんのか教えてくれねーか？」「…笑うなよ？..」

「ああ。」

「…実は、今付き合ってる女がいてな。鑑別所出て、会いに行つたら『もう、喧嘩はするな』って言われて…。学校にいたら、絶対喧嘩しちまつし…あんな高校出ても就職先なんてあるわけじゃないしどう。だから、学校辞めて働こうって。」

「…まあ、そんな理由じゃ…こいつらも納得はしねーか。」「…・・・・・。」

「…なあ、熊上。学校には来いよ。まだまだ青春を謳歌しようぜー！お前の彼女も学校辞める事までは望んじゃいねーよ。…お前に喧嘩はさせねえ。約束する。一緒に青校卒業してやるひづぜーなー？」

「…へつ、お前バ力だな…。はは、ははは。」

「なんだよーお前が笑うなよ！ー！」

「ははは、神谷くさこよーはははー！」

「な、屋代まで！ー！」

そこにには、少しだけ笑い声が響いた。

そして次の日、A組には熊上がもどり、新井、松井がまとめ約に起用された。

この事にA組はざわめいたが、熊上の威圧感によりみんな納得の表情を浮かべた。

そして、赤学の城崎にもその日の内に伝わり、青校と赤学の同盟は完全なるものとなつた。

そして、残りは黄山だけとなつた。

その黄山も青校の情報を聞きつけていた。

後に、この3つのぶつかり合いは大きな事件になる。

そして、その時はすぐそこまで近づいていた。

「あ、あんーーー?」

「…喧嘩しねーんじゃなかつたのかよ。」

そして、残りは黄山だけとなつた。

その黄山も、青校の動きを知らない訳ではなかつた。
後に、この3つのぶつかり合いは大きな事件になる。
しかも、その時は刻一刻と近づいていた。

しかし、神谷はそのことを今はまだ知る由もなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2925f/>

役者がためにオレは死ぬ。

2010年11月14日02時40分発行